



一般社団法人

# 国際数理科学協会会報

No.93/2015.1

編集委員：藤井淳一（委員長）

目次

\* シンポジウム案内

\* 寄稿

## 国際数理科学シンポジウムの開催のご案内

国際数理科学協会・代表理事 植松 康祐

これまで国際数理科学協会は、長年に渡る英文論文誌の発行を続けて参りました。

また、大阪大学・大阪教育大学・大阪府立大学等のご協力の下で、これまで存続できたものと思われ  
ます。しかし、近年会員数が減り、大学等からの協力金の打ち切りが相次ぎ、運営が困難となりつつあ  
ります。本協会が他学会と比べて、魅力に欠ける点は、研究発表会や会員の交流の場が不足しているこ  
とにあると感じておりました。

これまでも数理科学協会は、昔は夏に年会として、他学会でも行っているような研究発表会を実施し  
ていたと思われます。しかし、近年では、世話人として関西学院大学・地道先生と大阪大学・熊谷先生  
とのご努力で開催されているもの、本協会会員の全員に周知されたものとはなっておりません。そこで、  
学生会員の確保や会員に対して、研究発表を行える環境を提供したく、初めての試みとして、シンポジ  
ウムの開催するに至りました。

久し振りの研究発表会なので、今回は本来なら大会テーマなどは設定せずに、広く数理科学全般から  
発表を募集しようとしています。

一般発表と合わせて、特別講演も考えていますが、これからの人選を行いたいと思っています。どれ  
だけの、会員が集まって頂けるのかわかりませんので、とりあえず、初めての試みでもあるために、1日  
だけの開催といたしました。今後は、発表者が多くなれば複数日の開催も検討いたします。

是非、多くの学生発表を含めた、研究発表が行えますように、ご協力の程お願い申し上げます。また、  
懇親会も開催致しますので、情報交換等を含めた交流が活発となることを期待しています。

実行委員会やご講演などの面で、お願いに上がるかも知れませんがその際は、ご協力とご支援の程、  
よろしくお願い申し上げます。

# 2015年国際数理科学シンポジウム

開催日：2015年3月14日（土曜日）

場所：大阪国際大学・枚方キャンパス <http://www.oiu.ac.jp/access/>

## 発表論文募集

発表時間 15分 質疑応答 10分

事前申し込み：2015年1月20日

発表者氏名と発表タイトルをお知らせください。

論文原稿締め切り：2015年1月31日

予稿集：A4サイズで4ページ以内 Word または  $\text{TeX}$  でご提出ください。

その際、pdf形式も合わせてご提出ください。

提出先： [ed2tr@jams.jp](mailto:ed2tr@jams.jp)

参加費用： 会員 5000円

非会員 6000円

学生 3000円

懇親会費用： 5000円

実行委員長 植松康祐 (大阪国際大学)

実行委員 熊谷悦生 (大阪大学) , 会沢成彦 (大阪府立大学) ,

安達康生 (大阪国際大学) , 藤井淳一 (大阪教育大学)

\* 寄稿

## 代表理事を終えて

大阪府立大学名誉教授（前代表理事）  
寺岡義伸（Yoshinobu Teraoka）

文字通りワンポイントリリースの頼りない代表理事でしたが、何とか2年間（？）の務めを終え、この3月末に植松先生と交代していただくことが出来ました。また、5月末にはSCMJの編集委員長の方も交代していただき、重荷を降ろすことが出来ました。数理科学の全般をカバーする伝統ある英文学術誌 *Mathematica Japonica* (*Scientiae Mathematicae Japonicae*) を何とか守り、次の世代に伝えたいとの気持ちから、貫録不足を顧みず、責任ある立場をお引き受けしたのですが、十分な成果を残すことが出来ず、深く反省しているこの頃です。

*Mathematica Japonica* を知ったのは、私が大学院の院生だった頃からで40年以上にもなります。初めて私の論文を *Mathematica Japonica* に掲載したのは1979年 (Vol.24) で、この論文は、私の博士論文の一節にもなっております。幸い掲載後、国際的な Review 誌で紹介をしてもらい、うれしい思い出の一つともなっております。この頃、日本では純粋数学から応用数理までをカバーする学術誌が案外に少なかったためか、*Mathematica Japonica* は、我々が考えていた以上に海外で読まれていたように思います。1985年、インド統計研究所デリーセンターから招聘でニューデリーに3か月間滞在したとき、研究所の図書館には *Mathematica Japonica* のバックナンバーが全部揃っており、その上、その一冊を熱心に複写している研究所員を偶然見つけた時は、本当にうれしい気持ちになりました。誘われてベナーレス・ヒンドゥー大学で開催された学会に参加した時、インドでは、案外に日本のジャーナルが知られていることを知りビックリしました。この時、「インドでは共通語が無いため英語で高等教育をしているが、日本では何語で教育がされていますか。日本のジャーナルでは英語で論文を発表していますが」と聞かれたことが、今も耳の中に残っています。

*Mathematica Japonica* は1948年、清水辰二郎先生が私財を投じられて創刊されました。その後、*Scientiae Mathematicae Japonicae* (略してSCMJ) と名称を変更し今日に至っております。10年ほど前までは、投稿論文数が非常に多く、年間2巻6冊の出版にも拘らず、審査を通り掲載予定となった論文がプリント版として発行されるまでには2年ほど待たされました。このため、掲載予定となった論文の内容を少しでも早く会員に読んでもらうため、電子ジャーナルを発行することで対応されたそうでした。また、電子版でのみのジャーナル (*Scientiae Mathematica*) の刊行も試みられました。

ところが、国公立大学の法人化が実施され始めた頃からでしょうか、SCMJ への投稿論文数が著しく減少し、年間2巻6冊の発行を維持できない状況に追い込まれてしまいました。前代表理事（長尾先生）の苦渋の決断により、それまで年間6冊発行してきたSCMJを、年間出版冊数を3冊に変更し、今日に至っております。一時期には、私が編集委員長を務めていた時ですが、年間3冊の発行でさえ、次号発行のページ数確保のため、編集委員からの採択決定報告待ちといった状態もありました。幸い危機

を感じられた会員の皆様のご協力の結果、掲載予定で出版待機論文の蓄積ができ、危機的狀態を脱することが出来ました。

SCMJ への投稿論文数の減少の原因としては、色々考えられます。いつの頃からか世界中の有力なジャーナルに対してインパクト・ファクターと呼ばれる指標が付けられたこと、いわゆるジャーナルの序列化も大きな原因の一つでしょう。教員の昇格や採用人事に対して、この指標が大きな影響を与えているようです。研究者の業績評価に対して。確かに合理的な審査基準を与えているように見えるのですが、この指標を付けるのは、同じ分野に従事している研究者です。この指標が絶対評価と認めて良いかどうか疑問を持つのは私だけでしょうか。インパクト・ファクターが導入される以前からも、それぞれの学問分野でジャーナルの序列はあったようですが、まだ漠然としたものだったと思います。その上、無名の若い研究者がいきなり外国の有名なジャーナルに投稿しても、編集委員や審査員から何かと注文を付けられ、なかなか採択してもらえなかった話もよく耳にしました。私が若い頃、「歳を取り職階も上がっていくと安易に論文を書き難くなる。若い時だからどんどん論文が書ける。有名でないジャーナルでも良い。論文は、書かなければ書けなくなる。恥をかく覚悟で書きなさい。良いアイデアが生まれてから書くのではない。書いている内に良いアイデアが生まれてくる」とアドバイスを下さった先生のお顔が思い出されます。私は現在、満 71 歳。頸椎と腰部の脊柱管が狭窄する身体となり、新しい文献にも目を通し難い環境を中におります。上のアドバイスの意味をつくづく、実感するこの頃です。

インパクト・ファクターの影響で、多くの学協会誌が同じような状況に追い込まれているとの話も聞かされています。最近、この現象に反省も生じ、自分たちが発行しているジャーナルを守ろうとの動きも耳にします。

インパクト・ファクターに関係するのですが、数学関係の有名な Review 誌で紹介されているかどうか、投稿論文への大きな要因になっているようです。特に、この 10 年前から、昔からの伝統のある Mathematical Reviews や Zentralblatt だけでなく、インターネットを利用する電子版 Review 誌が多く発行されてきており、これら電子版 Review 誌の中で取り上げられているかどうかで、教員の人事に影響している国もあるようです。しかしこのような場合、多くの国では自国で発行されているジャーナルが Review の対象となっていることが多いようです。そう言えば私は若い頃、電気学会に入りましたが、ある大学院の電気工学専攻では博士号を取得するための条件として”電気学会論文誌に掲載された論文を基礎にして博士論文を作成すること”がありました。

このような Review 誌に取り上げてもらう条件として”審査を合格し発行待ちをしている論文が 1 年以上蓄積されていること。それも、過去 3 年以上、この状態が維持できていること”がありました。

その他、SCMJ への投稿論文数の減少には、色々原因が考えられるのですが、最大の問題は会員数が少ない、特に若い会員が少ないことでしょう。本協会が、一般会員制を取り始めたのは、20 年前のことでした。それまでは協力校制度を採用しておりましたが、別に問題は無く、先にも書きましたように、純粋数学から応用数理まで、多くの論文が投稿されてきたようです。ところが、応用系の分野では応用数理学会をはじめ、多くの学協会が設立され、これに伴い多くのジャーナルも刊行されてきました。

それまで、ヤポニカに投稿してくれていた研究者が、他のジャーナルへ投稿し始めたのも、大きく影響しました。会員の皆様、国際数理科学協会を守り、SCMJを何時までも維持させるためにも、是非知り合いで、数理科学に関係する方に、国際数理科学協会への入会を働きかけて下さいますよう、お願い申し上げます。以前にも申し上げましたように、私達の Mathematica Japonica や Scientiae Mathematicae Japonicae に掲載した論文を基礎にして博士論文を書かれた方も多いと思います。

私事になりますが、私が専門分野を電気工学から応用数学へ方向転換をしてから初めて書いた論文は”最適な保険契約”に関する研究結果でしたが、日本科学技術連盟が発行している Report of Statistical Applications Research, JUSE という名の統計の応用や品質管理の論文を扱う、当時は有名なジャーナルに発表しました。Mathematical Reviews の中で紹介され Zentralblatt からは abstract の請求がありました。外国の研究者から別刷の要求もあり、喜んでいたのですが、日本品質管理学会や日本 OR 学会等が設立されるに及んで、このジャーナルへの投稿論文数が減少し、ついに廃刊になってしまいました。統計関係の研究者で、現在このジャーナルを知っている研究者は殆どおられないと思います。

自分の論文が掲載されたジャーナルが廃刊となってしまうことは、本当に悲しいことです。しつこく書かせていただきますが、私達会員は自分の問題として、SCMJ に掲載した論文を基礎にして博士の学位を取得した研究者に対して、SCMJ を守り永続させる義務があると考えます。このためにも、若い会員の確保は、国際数理科学協会が現在当面する重要な課題と思います。同時に、現職のバリバリの先生方にもお願いします。論文が出来たら、是非 SCMJ への投稿をお願いします。何年前のことでしたか「日本人が良い論文を日本のジャーナルに投稿しないと、日本のジャーナルは育たない」と、教授に昇格されてから以後は、自分が育てたいジャーナルに論文をどしどし投稿し、別刷りを外国の著名な研究者に送付しておられた、有名な先生がおられました。若い会員の勧誘をお願いしましたが、老人パワーの活用もお願いしなければなりません。80歳を越えられても、まだまだ現役に負けず、論文を書いておられる会員の方には本当に頭が下がります。本協会では、定年退職直前の63歳になりますと、終身会員制度の特典を受けることが出来ます。そして73歳以上の会員は会費が無料としております。日本数学会では75歳以上の会員で自己申告をされた方が名誉会員に推薦されておりますが、本協会では73歳以上の方をどなたか会員からの推薦としております。叙勲の際には推薦文に国際数理科学協会名誉会員であることが書け、感謝されております。

色々ゴタゴタ書きましたが、自分たちの学協会は自分たちで守り育てる。この心を会員の皆様に、お願い申し上げます。

最後に、私の後任として植松先生にお世話になることとなりましたが、お住いが堺市内にあり、長年にわたって国際数理科学協会の監事として支えて下さいました。お気の毒なのは、この4月から大阪国際大学の研究科長に任命され大変お忙しい方ということです。それだけ何事にも、責任を持ってやって下さる人望の高い方です。国際数理科学協会を発展させるための色々な方策を持っておられます。協会の明日をお願いします。